

まえがき

本書は、1980年代以降、アフリカ諸国が経験することになったさまざまな政治経済の変動が、アフリカの農村社会にどのような変容をもたらしたのかを明らかにしようとしたものである。多くのアフリカ諸国の農村社会は、構造調整政策によってグローバルな市場経済の浸透を経験するとともに、「民主化」による複数政党制の導入などによってこれまで以上の存在感をもった国家と対することとなった。これまで市場や国家から比較的自律していたともいえるアフリカの農村社会は、現在市場経済や国家に取り込まれていく過程にあるといえよう。このような構造的な変化は、個人の力で制御することは困難である。本書では、このような農村社会の変容に対して、人々がどのように集い、ともに生存戦略を立てて対抗しようとしているのか、そしてそのためにどのような困難に直面しているのかを、公共圏や市民社会の議論を援用しつつ検討したものである。この研究会のテーマとしてこれらの概念を議論の中心にすえたのには、アフリカが抱える問題を単なるアフリカ固有のものではなく、より普遍的な社会変容として分析したいという意図もあった。

本書は、アジア経済研究所で平成19～20年度に実施された共同研究会「アフリカ農村の住民組織と市民社会」の最終報告である。まず市民社会とはなにかということから始まり、アフリカ農村社会の具体的な事例とどのように結びつけることができるのか、市民社会や公共圏といった議論からは門外漢の地域研究者である我々にとっては、試行錯誤の2年間であった。さまざまな分野の読者からのご批判をいただければ幸いである。

2年間の研究会活動をふりかえり、まずは、研究会委員諸氏に心からの感謝を申し上げたい。未熟な主査であるにもかかわらず、まがりなりにも本の

形にまでたどり着けたのは、委員の方々のおかげである。そして、研究会の運営にあたっては、さまざまな方々にお世話になった。改めて感謝の意を表したい。講師として研究会でご報告いただいた遠藤貢氏，荒木美奈子氏，重富真一氏，幡谷則子氏，井上弘貴氏，野沢慎司氏，阪本公美子氏，石井洋子氏には，研究テーマを多角的な視野から考える機会を提供していただいた。また，オブザーバーとして研究会に参加してくださった方々からも有益な助言をいただいた。そして幹事として研究会活動を支えてくれた原島梓氏にも，新天地でのご活躍を祈るとともに感謝を申し上げたい。そして最後に，研究所内外の匿名の査読者の方々からは厳しくも有益なご指摘をいただいた。ここに記して感謝したい。

2009年8月

編 者